

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00684

研究課題名（和文）事態把握に基づく日英語表現の認知構文論的研究

研究課題名（英文）A Cognitive Linguistic Construal-Based Approach to English and Japanese Expressions

研究代表者

堀田 優子（HORITA, Yuko）

金沢大学・人文学系・教授

研究者番号：90303247

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：

本研究は、日英語の様々な構文（表現形式）を取り上げ、認知言語学の観点から、根底にあると想定される認知主体の事態把握の仕方と表現形式の多様性との関係性やその動機づけを明らかにしようとするものである。また、日英語の小説とその翻訳をベースにした日英語の平行コーパスを作成して、大規模コーパスやWeb検索ではなかなかできない、コンテキストも踏まえた日英語表現の比較を行うことによって、言語間あるいは表現間の相違点や多様性を浮き彫りにし、事態把握による類型化の研究に対しても実証的な裏付けを与えようと試みている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日英語の事態把握・認知類型の差異については、認知言語学の分野で研究が進んでおり、日英語では好まれる事態把握が大きく異なることがすでに指摘されている。本研究では、より幅広い日英語の表現形式（構文）を取り上げ、作成した平行コーパスを用いて、日英語間の違いを捉え、「事態把握」の観点からその動機づけを明らかにしようとしており、認知文法の枠組みから統一的な説明と実証的な裏付けを与えようとする点で、これまでの日英語の対照研究や事態把握による類型化の研究に対して貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）：

This study focuses on various forms of expression in Japanese and English, examines the relationship between the various construals imposed on a scene by the conceptualizer and the diversity of the forms of expression in English and Japanese, and attempts to elucidate their motivations from a cognitive linguistic perspective. In this study, I created parallel corpora of Japanese-English expressions based on Japanese-English novels and their translations. Using the corpora helps the comparison between the original text and the corresponding translated expressions, and highlights the differences and diversity between two languages. Moreover, this study can provide empirical support for cognitive-typtological studies.

研究分野：英語学

キーワード：認知言語学 認知文法 事態把握 対照研究 日英語

1. 研究開始当初の背景

認知文法の提唱者である Langacker (1987, 1991) は、本来「客体」として解釈され記述対象とされるものの意味にも、「概念主体」である話者の主観的な「捉え方・解釈 (construal)」が (程度の差はあれ) 反映されていると主張する。中でも、言語主体 (話者) と記述対象である客体との関係を、「観る側」と「観られる側」の関係に置き換えて捉えた視点構図を用いて、概念主体による2つの事態把握 (「客観的事態把握」と「主観的事態把握」) と言語表現との間の対応関係を示した。さらに、その二つの視点構図は、多くの (日本の) 研究者によって、言語間の事態把握の傾向の違いを捉える際に適用され、欧米の主要な言語では「客観的事態把握」、日本語では「主観的事態把握」を基本としていると主張されている (池上(2004, 2005)の「客観的把握」と「主観的把握」、中村(2004)の「Dモード」と「Iモード」、Uehara(1998)の「客観的フレーム言語」と「主観的フレーム言語」など)。また、そうした事態把握の違いは、「する」的 vs. 「なる」的、モノ的 vs. コト的、HAVE 言語 vs. BE 言語といった、英語と日本語の好まれる形式上の違いにも反映されている (池上(1981))。

そこで、まずは、これまで様々なアプローチで研究されてきた「他動性」や「主語」の問題に関わる日英語の様々な表現形式を取り上げ、主に認知文法に基づく「事態把握」の観点からそれらを捉え直し、人間の事態の「捉え方」と言語形式との対応関係やその動機づけについて明らかにしたいと考えた。

本研究で着目する、ヴォイス (態) に関わる「他動性 (transitivity)」の問題は、Hopper & Thompson (1980) に始まり、多くの言語事象の分析に用いられてきた (通言語学的研究としては、池上(1981)、角田他(編)(2007)など)。本研究代表者も、これまで英語の結果構文や同族目的語構文を中心に、他動詞構文の形を取りながらも、他動詞だけでなく自動詞も共起できる、特異な言語表現に関して「他動性」の観点も取り入れた認知言語学的研究を進めてきた (Horita (1995, 1996), 堀田(2018)など)。他動詞文で表される英語表現の中には、日本語で同じように他動詞文の形で訳すことが難しいものが多い。また、「主語」に関しては、「英語においては、主語が明示されなければならない、概念主体を示す一人称主語であっても省略できないが、日本語では省略可能である」ことが知られている (益岡(編)(2004)など)。

これまで、「他動性」と「主語」の問題が関係する個々の言語事象の分析や日英語の類型論的傾向を示す研究は多くなされてきているが、「事態把握」の観点から、統一かつ包括的に検証し直した研究はまだ少なく、日英語の様々な表現形式を対象に、人間の認知の仕方 (概念化) と言語形式との多様な関係性を明らかにしようと考え、研究を進めることとした。

2. 研究の目的

本研究は、日英語の様々な言語事象を取り上げ、根底にあると想定される認知主体の事態把握の仕方と表現形式の多様性との関係やその動機づけを明らかにすることを目的とする。

研究の手始めとして着目する「他動性」にまつわる言語事象として、日英語における「他動詞文 / 自動詞文」で示される事象の違い、日本語のヲ格を取る表現と対応する英語表現の違い (例: 道を歩く / 'walk on the road')、英語では1つの他動詞節で表せるが日本語では他動詞節で表すことが難しい (あるいは制約が多い) 構文 (例: 移動使役構文と結果構文)、別の言語では対応する1つの表現形式がない、独特な表現 (英語の同族目的語構文や日本語の被害受身など) を取り上げる。次に、「主語」に関わる問題として、日英語における主語省略の有無と主体性 (subjectivity) の関係、英語特有の表現である形式主語 *it* の役割などを取り上げる。

このような個々の言語事象の研究を洗い出し、大規模コーパスやパラレルコーパスから得られるデータをもとに検証し直して、事態把握の認知モデルを用いた統一かつ実証的な分析を行いたいと考える。

3. 研究の方法

まず、「他動性」や「主語」の問題にまつわる多くの先行研究について、整理と検証を行う。また、それらの問題についての認知言語学における最新の研究動向も探る。

並行して、英語と日本語の大規模コーパス (British National Corpus や Corpus of Contemporary American English、国立国語研究所が提供するコーパスなど) や Web 検索等を使って、研究対象とする日英語の構文 (言語形式) のデータを収集し、それらの構文の先行研究の検証を行って、認知文法の枠組みでの新たな分析を試みる。

さらに、日英語における同一事態の表現形式の違いを具体的にみるため、日英語の小説とその翻訳からなるパラレルコーパスを作成し、データ分析を行う。そこで得られたデータを基に、同一事態の日英語の表現形式の違いについて「事態把握」の仕方を表す認知モデルを用いて分析を試みる。

4. 研究成果

まず、「他動性」や「主語」の問題にまつわる最新の研究動向を探り、多くの先行研究の整理と認知言語学的観点からの検証を行うことができた。特に、「他動性」の問題に関わる英語の2つの構文（使役移動構文と結果構文）の構文文法における研究（Goldberg (1995)）を基に、英語の大規模コーパス（BNC、COCA、WordBanks Online など）や国立国語研究所が提供する日本語のコーパス、Web上の検索エンジンなどを用いて、データ収集を行った。英語の構文においては、動詞との共起頻度を基に、プロトタイプ的な表現だけでなく、周辺的な表現について、抽出データから検証を行い、予想外に共起頻度の高い表現や逆に一度限りの新規の表現にも注意を払って、構文の意味拡張の引き金となる可能性について分析を試みた。その研究成果の一部については研究発表を行った。一方、「主語」の問題に関わる日英語の表現形式については、パラレルコーパスの作成を待ってから比較対照を行ったため、データ収集と分析に遅れが生じ、十分な成果をあげることができず、独自の具体的な分析をまとめるまでには至らなかった。

本研究は、認知言語学の観点から、日英語の様々な構文を取り上げ、複数の日英語の小説とその翻訳をベースにした日英語のパラレルコーパスを用いて、言語間あるいは表現間の相違点や多様性を浮き彫りにするだけでなく、同一事態を表す日英語の構文表現の有無や差異を、言語間の認知類型・事態把握の差異と関連づけて、事態把握による類型化の研究にさらなる実証的な裏付けを与えようとするものである。分析対象とする表現のうち、プロトタイプ的な役割を果たしている一定の表現は英語の大規模コーパスや日本語のコーパス、Web上の検索エンジンなどからもその用例を抽出できるが、頻度が少なく、周辺的な表現に関しては、コンテキストを踏まえて検討する必要があり、それは大規模コーパスからのデータでは捉えにくい部分である。そのため、ジャンルは小説に限定されるものの、日英語の小説とその翻訳をベースにした日英語のパラレルコーパスを作成して複数の日英語の小説全体（原本と翻訳）をデータ化することで、原文と翻訳の比較対照を網羅的に行うことができただけでなく、同一場面の捉え方の違いが言語表現にどう反映しているのかを具体的に掴むことができた。こうしたパラレルコーパスの使用は、コンテキストも踏まえた日英語表現の比較を行うために、さらには、作者や翻訳者の個人レベルの特徴や傾向を超えた、日英語の類型論的違いを明らかにする上で、大変有用であったといえる。

本研究期間の前半までに作成したパラレルコーパスからの収集データが十分ではなかったため、作品を増やしてデータの追加作業を行い、本研究期間中に、合計、日本語小説（長編1本、短編10本）とその英語翻訳、英語小説（長編2本）とその日本語翻訳によるパラレルコーパスを作成することができた。それらの作成したパラレルコーパスを用いて、日英語の特徴を反映した表現を対照させて、言語間あるいは表現間の相違点や多様性について、認知主体の事態把握の仕方と関連づけた認知言語学的観点から分析を進めている。しかし、英語構文の分析に比べ、日本語の対応表現に対する独自の具体的な分析については十分とはいえず、研究期間中の成果発表には至らなかった。しかし、継続して日英比較の観点から研究を推し進めており、その研究成果は論文や著書の形で発表する予定である。

また、パラレルコーパスを用いて、日英語の小説のテキストデータを比較対照した結果、異なるものとして抽出される事例には、語彙レベル、文レベルにおいて様々な種類のものがあり、本研究が対象とする言語事象だけでもかなり広範なものに及ぶ。それに加えて、パラレルコーパスによって、もう少し大きなパラグラフ単位での比較が可能となるため、原文と翻訳では文の順序が異なっていたり、描写自体が異なっていたり、さらには翻訳自体なされていなかったりする箇所をいくつも見つけることができた。そうしたケースまでもも分析の対象とし、その動機づけを明らかにしている認知言語学的対照研究はまだ少なく、新たな研究課題として取り組んでいきたいと考えている。

今後も、作成したパラレルコーパスを使って、言語間あるいは表現間の相違点や多様性を浮き彫りにし、同一事態を表す日英語の構文表現の有無や差異を、言語間の認知類型・事態把握の差異の点から捉え、その認知的動機づけを明らかにすることを目指して、本研究を継続していくつもりである。

<引用文献>

- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: University of Chicago Press.
- Hopper, Paul and Sandra A. Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse," *Language* 56, 251-299.
- Horita, Yuko (1995) "A Cognitive Study of Resultative Constructions in English," *English Linguistics* 12, 147-172.
- Horita, Yuko (1996) "English Cognate Object Constructions and Their Transitivity," *English Linguistics* 13, 221-247.
- 堀田優子 (2018) 「Mary smiled a merry smile. は「陽気な微笑みを微笑んだ」?—同族目的語構文の特性と意味解釈—」, 米倉緯・中村芳久(編) 『英語学が語るもの』, 143-160, 東京: くろしお出版.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』, 東京: 大修館書店.

- 池上嘉彦 (2004, 2005) 「言語における <主観性> と <主観性> の言語的指標」, 山梨正明・辻幸夫・西村義樹(編) 『認知言語学論考』, No. 3, 1-49, No. 4, 1-60, 東京: ひつじ書房.
- Langacker, Ronald W. (1987, 1991) Foundations of Cognitive Grammar, vol.1 & vol.2, Stanford: Stanford University Press.
- 益岡隆志(編) (2004) 『主題の対照』, 東京: くろしお出版.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」, 中村芳久(編) 『認知文法論』, 3-51, 東京: 大修館書店.
- 角田三枝・佐々木冠・塩谷亨(編) (2007) 『他動性の通言語的研究』, 東京: くろしお出版.
- Uehara, Satoshi (1998) "Pronoun Drop and Perspective in Japanese," Japanese/Korean Linguistics 7, 275-289, Stanford: CSLI Publications.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 堀田優子
2. 発表標題 構文構築と事態認知：英語構文を例に
3. 学会等名 金沢言語学フォーラム
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------